

備忘録ないしは切り抜き帳(その191)

[2021年12月24日(金)]

○本日の東京新聞夕刊に掲載された、鷲田清一氏の論説『骨太のまっすぐな言葉 政治の酷薄に抗うには』を右に転載させて頂きたい。「これまでも、えげつない政治はあまたあったけれど、戦後政治をふり返るに、この九年間ほどに酷薄な時代はかつてなかったように思う」それは正に安倍晋三、菅義偉両氏による無責任でやりたい放題の政治であった。今、悪名高い『アベノマスク』の処分方法が問題になっているが、安倍・菅両政権に唯唯諾諾と従ってきた自民党の国会議員は、それ相応分のアベノマスクを自費、もしくは問題の文通費でもって買い取って戴きたいものである。

[2021年12月25日(土)]

○朝日新聞デジタルが今朝ほど配信した『アベノマスク「もう捨てようよ」 首相が気をもんだ安倍氏への対応』を以下に転載させて頂きたい。「政府は24日、大量に保管する「アベノマスク」について、希望する自治体や個人らへの配布の受け付けを始めた。新型コロナ対策として調達した布マスクだが、多額の保管費用などで批判を浴び、岸田文雄首相が今年度内の廃棄を決定。一方で、首相らが神経をとがらせたのは、この政策を推し進めた安倍晋三元首相への配慮だった。布マスクの在庫は現在、約8千万枚。10月には会計検査院の調べで、保管に約6億円かかっていることも指摘されていた。首相は今日21日の記者会見で、希望者に配布したうえで年度内に廃棄する方針を突然表明。厚生労働省は24日から1月14日まで配布希望を受け付け、来年3月には残った分を廃棄処分する。首相が廃棄に大きく傾いたのは、臨時国会が閉会した21日までの約1週間だったという。布マスクの保管をめぐる、野党側から政府対応を批判する国会質問が寄せられていた。21日の参院本会議で、首相は立憲民主党の杉尾秀哉氏に対し「昨年4月から5月に厚労省が直接検品したところ約7100万枚のうち約1100万枚、約15%が不良品」と答弁。さらに、検品費用に10億円以上かかったことも説明した。さらに国民民主党の川合孝典氏は「このままのペースだと、在庫処分に要する期間は33年以上かかる計算となる」と批判した。官邸幹部によると、首相はこうした国会答弁の練習の際に、「これはさすがになんとかしないと……」と漏らしたという。実は政権内では、布マスクを工夫して有効活用できないか模索する動きもあった。不織布の素材をマスク内に挟み込み、二重構造にすることで性能を改善する試みだった。ただ、その分のコストは追加でかかる。検討のすえ「さらに税金を投入して活用するのはありえない」（政府関係者）と断念した。こうしたなか、来年度予算案の閣議決定を24日に控え、首相は引き続き保管を続けるのか判断を迫られていた。首相は保管費用の重さを重視し、周辺にこう指示したという。「もう捨てようよ」一方、廃棄にあたって、首相ら政権幹部が気をつかったのが自民党最大派閥の領袖でもある安倍氏への対応だった。布マスクは昨年4月、当

「政治はもう、それ以上酷薄になりようがない」と思っていたけれど、この九年間ほどに酷薄な時代はかつてなかったように思う。首相の姿勢がそうだが、それ以上に、それに同調、もしくはそれを黙認してきた政権と野党の議員も、あるいは一部の自派議員も、わたしは「残念」と感じている。わたしは、

「これまでも、えげつない政治はあまたあったけれど、戦後政治をふり返るに、この九年間ほどに酷薄な時代はかつてなかったように思う。首相の姿勢がそうだが、それ以上に、それに同調、もしくはそれを黙認してきた政権と野党の議員も、あるいは一部の自派議員も、わたしは「残念」と感じている。わたしは、

「政治はもう、それ以上酷薄になりようがない」と思っていたけれど、この九年間ほどに酷薄な時代はかつてなかったように思う。首相の姿勢がそうだが、それ以上に、それに同調、もしくはそれを黙認してきた政権と野党の議員も、あるいは一部の自派議員も、わたしは「残念」と感じている。わたしは、

「これまでも、えげつない政治はあまたあったけれど、戦後政治をふり返るに、この九年間ほどに酷薄な時代はかつてなかったように思う。首相の姿勢がそうだが、それ以上に、それに同調、もしくはそれを黙認してきた政権と野党の議員も、あるいは一部の自派議員も、わたしは「残念」と感じている。わたしは、

政治の酷薄に抗うには



鷲田 清一

「政治はもう、それ以上酷薄になりようがない」と思っていたけれど、この九年間ほどに酷薄な時代はかつてなかったように思う。首相の姿勢がそうだが、それ以上に、それに同調、もしくはそれを黙認してきた政権と野党の議員も、あるいは一部の自派議員も、わたしは「残念」と感じている。わたしは、

「これまでも、えげつない政治はあまたあったけれど、戦後政治をふり返るに、この九年間ほどに酷薄な時代はかつてなかったように思う。首相の姿勢がそうだが、それ以上に、それに同調、もしくはそれを黙認してきた政権と野党の議員も、あるいは一部の自派議員も、わたしは「残念」と感じている。わたしは、

「政治はもう、それ以上酷薄になりようがない」と思っていたけれど、この九年間ほどに酷薄な時代はかつてなかったように思う。首相の姿勢がそうだが、それ以上に、それに同調、もしくはそれを黙認してきた政権と野党の議員も、あるいは一部の自派議員も、わたしは「残念」と感じている。わたしは、

「これまでも、えげつない政治はあまたあったけれど、戦後政治をふり返るに、この九年間ほどに酷薄な時代はかつてなかったように思う。首相の姿勢がそうだが、それ以上に、それに同調、もしくはそれを黙認してきた政権と野党の議員も、あるいは一部の自派議員も、わたしは「残念」と感じている。わたしは、

時首相だった安倍氏が全世帯に配布すると表明し「アベノマスク」と呼ばれるようになった。介護施設向けなどと合わせて計約2億9千万枚を調達。ただ、品薄状態が解消しつつあったにもかかわらず、施設向けに約5800万枚を追加発注して多くが在庫になった経緯がある。廃棄発表の前に、官邸幹部らが安倍氏周辺に首相の意向を伝えただけでなく、首相自身も安倍氏に直接連絡する念の入れようだった。関係者によると、首相が「廃棄します」と伝えると、安倍氏は「どうぞ」と応じた。官邸幹部によると、首相は安倍氏から理解を得られたと感じていたという。根回しを終えた首相は、21日の会見でまず、「昨春は未知のウイルスへの不安の中、多くの国民がマスクがまったく手に入らずお困りでした」と意義を説明。「マスク不足に対する心配は完全に払拭されるなど、所期の目的は達成されました」と述べ、安倍氏への配慮をにじませた。政府は配布の受け付けを始めたが、どれだけニーズがあるかは不透明だ。仮に在庫すべてを廃棄した場合の費用は約6千万円だという。鈴木俊一財務相は24日の会見で、さらに廃棄の費用がかさむことについて、「ずっと持ち続けると保管費用がかさむ」とし、「俗な言葉で言えば『損切りをする』』というようなことではないか」と語った。」

[2021年12月26日(日)]

○12月04日に配信された朝日新聞論座に川崎一朗氏(京都大学名誉教授)の『大伴家持と「立山の賦」地球科学で見た“都”中心史観 コロナ禍の先へ 東京中心ではなく自らの目で気づこう「地方の誇り」』と題する大変興味深い論説が掲載されていたので、途中までであるが以下に転載させて頂きたい。「コロナ禍による人々の生活の不安定化、デジタル化に伴う知識の限りない断片化、ネット社会における罵詈雑言の氾濫など、社会の行方に対する不安が増大している。コロナ禍の先の社会「地方の自立」に期待も…… コロナ禍の長期戦の先に、揺り戻し、あるいは再成熟とでも言うべき新しい時代が到来するものと私は楽観している。デジタル化は止まらないので再成熟化は以前に戻ることはあり得ないが、それが何かは私には予想できない。ただその場合、論理は飛躍するが、アカデミズムの世界においては「人文学と自然科学の境界を越える知識の拡大」、社会においては「地方の自立」などが改めて大きな要素になるのではないかと予想し、期待している。このような問題意識を駆動力に、多くの関連分野の研究者の助力を得て、この11月、『立山の賦 地球科学から』を富山の出版社桂書房から出版させて頂いた。『新しい世界史へ』(羽田正,岩波新書,2011)向かおうという時代に「何故立山なのか?」と疑問を感じる人は多いかもしれない。しかし『新しい世界史へ』は非ヨーロッパ世界の文明の豊穡さを認識し、ヨーロッパ中心史観への異議申し立ての書である。この本を読んだとき、国内でも同様のことが当てはまるのではないかと思った。都(古代においては平城京や平安京、現在にあっては東京)中心史観の土台の上に築かれた、大地と人の歴史観が地方の自立の足かせになっているような気がしたのである。それは『立山の賦 地球科学から』の背景の一つとなった。同書の中の幾つかを素材に、コロナ禍の先を睨んでささやかな問題提起を行いたい。同書では、立山を空間的基軸に限定し、古生代から2011年東日本大震災後の地震活動までの大地と人の通史を目指した。通史と言ってもすべてを満遍なく語る能力は持たないので次の4点に大きな比重をかけた通史らしきものである。(1)小竹(おだけ)貝塚(富山市呉羽)の標高の謎などを素材に、地球科学から考古学や古代史に架橋する試み、(2)大伴家持の立山の歌々を無視した伝統的な歌論への異議、(3)関連分野の多くの研究成果に基づく立山・黒部の第四紀隆起復元像、(4)2011年東日本大震災以降に飛驒山地周辺で生じた規格外の地震現象。 **大伴家持の立山の歌々を“無視”した伝統的な歌論** まずは「大伴家持の立山の歌々を無視した伝統的な歌論への異議」について語りたい。1978年4月に創設された富山大学理学部地球科学教室の教員に採用され、私は東京から富山に移り住んだ。そこで立山連峰の眺望の壮麗さ、剛毅さに圧倒され、毎日眺め続けた。大伴家持が国守となって越中(現在の富山県。当時は能登も含む)の地に赴いたのは746年8月(天平18年7月)である。747年5月から6月(天平19年3月末から4月末)、家持は「越中三賦」と呼ばれる「二上山の賦」「布勢の水海に遊覧する賦」「立山の賦」と、その反歌を詠んでいる。『立山の賦 地球科学から』はそこから採らせて頂いた。748年3月初め(天平20年正月末)、家持は越中諸郡の巡行に出た。雄神河(庄川)、婦負(めひ)河(神通川)から延槻(はひつき)河(早月=はやつき=川)に至って家持は次の歌を詠んだ。立山(たちやま)の 雪し消(く)らしも 延槻の 川の渡瀬(わたりぜ) 鑑(あぶみ) 浸(つ)かすも…立山から流れ下る早月川の早春の雪解け水の流れは冷たく、そこに踏み入れた馬は思わぬ動きをし、そのため足を掛ける鑑を濡らしてしまった…という意味だ。私は、立山周辺の冬から早春に向かう一瞬を切り取った素晴らしい



著書『立山の賦 地球科学から』(桂書房、2021)

か。それなのに「皇族数の確保」に論点をすり替え「国論を二分する」などとして女性・女系天皇など肝心のテーマには踏み込まなかった。悠仁さま以降の皇位継承は「機が熟していない」として、将来議論すべきこととした。先送りではいけないはずだ。女性皇族が今後、結婚すれば、次々と皇籍を離脱する。この最終報告だと世論の多くが理解を示す女性天皇・女系天皇論を事実上封じ得る。男系男子主義の保守層に配慮した内容としか思えない。最終報告は年明けに国会報告される。与野党間で真の皇位継承策が論議されることを望む。」
 〓 何度も言うようであるが、側室を認めない条件下で男系男子主義を保持するには、どうしても無理がある。変な小細工をするよりも女性天皇・女系天皇論を受け入れるのが順当ではないだろうか。それよりも最近、急速に皇室に対する国民の尊崇の念が薄れつつあることの方が問題ではないのか。そしてそれは、同じく最近急速に増えつつある政治不信とも無関係ではないように思われるのであるが。

[2021年12月29日(水)]

○昨日来、東京新聞が報じている『安倍元首相、再び不起訴で捜査終結「桜を見る会」前日の夕食会費補填問題で東京地検特捜部』なる記事を、以下に転載させて頂く。「安倍晋三元首相の後援会が「桜を見る会」の前日に主催した夕食会の費用補填問題で、東京地検特捜部は28日、公職選挙法違反と政治資金規正法違反の疑いで東京第1検察審査会が「不起訴不当」と議決した安倍氏を、再び不起訴(嫌疑不十分)とした。検審の議決が「起訴相当」ではなかったため2度目の審査は行われず、捜査は終結した。夕食会は東京都内のホテルで「安倍晋三後援会」が会費5000円で主催。不足分は安倍氏側が補填して支払っていた。特捜部は昨年12月、2016～19年分の政治資金収支報告書に夕食会の収支計約3000万円を記載しなかった政治資金規正法違反の罪で、後援会代表だった元公設第1秘書を略式起訴。安倍氏に関してはすべて不起訴とした。検審は今年7月、補填が参加者への寄付に当たるとする公選法違反と、安倍氏が代表を務める資金管理団体「晋和会」の会計責任者の選任・監督を怠った政治資金規正法違反の2つの容疑で、安倍氏の不起訴は「不当」と議決。特捜部が一部の参加者や安倍氏らの供述だけで判断したことを問題視した。◆特捜部、聴取対象を広げるも…特捜部は今回、聴取対象を広げるなどして再捜査したが、公選法違反については、提供された食事が会費以上の寄付に当たるとの認識が参加者にあったとは立証できないと判断したとみられる。政治資金規正法違反に関しても、起訴するための十分な証拠がなかったとした。2018年の夕食会に関する公選法違反容疑など一部では時効が成立した。安倍氏の事務所は「厳正な捜査の結果、不起訴と決定されたものと受け止めています」とのコメントを出した。◆虚偽記入容疑も不起訴 また、特捜部は28日、安倍氏側が訂正した収支報告書の内容が虚偽だとして、政治資金規正法違反(虚偽記入)の疑いで弁護士有志らに告発された安倍氏や元公設第1秘書らを、いずれも不起訴(嫌疑不十分)にしたと発表した。弁護士有志は検察審査会に審査を申し立てるとしている。」
 〓 いまさら言うまでもないことであるが、安倍長期政権が行った不正の数々によって政治家のモラルは地に落ち、官僚のプライドはズタズタに引き裂かれてしまった。頼みの綱である検察特捜部までもあてにならないとなるとこの国はいったいどうなるのだろうか。



「桜を見る会」で挨拶する安倍首相(当時)=2019年4月、東京・新宿御苑



[2021年12月31日(金)]

○今朝の朝日新聞社説『コロナの波の中で こぼれ落ちた記憶を紡ぎ直す』を以下に転載させて頂く。「「コロナも忘れる10分間リフレッシュ」。今年初め、マッサージ店のそんな看板を見た。わずかな時間でも頭からコロナを消し去りたいという、世の中の思いが詰まったコピーだった。国内で小康状態が続いたこの秋、「忘れられる日」の到来を期待した人は多かったはずだ。ところが新たな変異株が見つかり、年の瀬の列島を再び不安が覆う。ただワクチンや治療薬の開発・普及が進み、心のなかの景色は以前とはいささか違うように映る。■歴史に埋もれた災厄 歓迎すべき変化なのだろう。しかし気がかりな面もある。こうやって緊張と弛緩を繰り返すうちに、忘れてはならない話と一緒に記憶の奥底に追いやってしまうことにならないか。大正時代の半ばに世界中で大流行し、国内だけで約40万人が亡くなったいわゆるスペイン風邪を思い起こすと

継承することの難しさを痛感する。今回のコロナ禍まで、約100年前のこの災厄が一般の人の関心を集めることは、ほとんどなかったと言ってもいい。それを象徴するような跡が兵庫県宝塚市にある。火の神・台所の神として古くから信仰を集める清荒神清澄寺の裏山の中腹にたつ高さ5mほどの石碑だ。「大正8,9年流行感冒病死者群霊」と刻まれ、大阪の薬剤師がスペイン風邪がほぼおさまった3年後に、犠牲者を悼んで建てたことを伝える。寺などによると、40年ほど前までは参拝客が行き交う、本堂脇のよく目立つ場所に立っていた。しかしその後、部外者は立ち入れない場所に移されたという。理由はわからない。同じ人物が建てた碑が大阪市内の一心寺にもあるがこちらにも顧みられることはまずなかった。スペイン風邪の場合、こうした遺構だけでなく、人の脳裏に焼きつくような写真や映像も乏しい。流行の始まりや終わりがいつなのか判然とせず、節目となる日も定め難い。パンデミックは、戦争や地震などに比べても、後世に伝えるのが難しい性質をもつ出来事といえる。■議論・定着・継承もちろん図書館や博物館には当時を語る資料が保存されている。多くの文人が経験を書き残したし、新聞報道もあった。だがそうした記録だけでは、ただちに継承につながらないと、福間良明・立命館大教授(歴史社会学)は指摘する。「人々の間に『記憶』として定着していくためには、ばらばらで膨大な記録から切り口を探り当て、議論を重ねなければなりません。どんな議論になるかは、人々の意識や社会の状況次第、コロナ禍の記憶もこれから作られるのです」現実はどうだろう。コロナ禍に翻弄され、非日常が日常になるなかそのときに考えたことや抱いた思いが、一人ひとりの中からこぼれ落ちていってはいないだろうか。それに気づかされるのが、作家の綿矢りささんがこの秋に刊行した日記「あのころなにしてた？」だ。たとえば、こんなくだりがある。「“自粛の強化が必要”と“気にしすぎても経済が回らない”が交互にくり返され洗濯機のなかで洗浄モードと脱水モードが延々くり返されるなかで、ちょっとずつ生地がすり減っていく洗濯物みたいな気持ちになった」(2020年12月3日) 共感を寄せる読者は多く、コロナ禍の日々が「もうすでに懐かしい」との感想も届いているそうだ。懐かしさを通り越した先にあるのが忘却だ。経済活動の収縮で真っ先にしわ寄せを受ける社会的弱者の悲鳴。ロックダウン、アラート、野戦病院といった勇ましい言葉の氾濫。医療逼迫の下で強行された五輪が現出させたパラレルワールド(並行世界)——。代々の政権が検証の先送りを決め込むなか、うやむやにされようとしている政治の迷走や、非常時が浮き彫りにした社会のひずみ、不条理も少なくない。■ふり返る時間をもつ 肉親や親しい知人を亡くすなど、悲痛な体験をした人が、このコロナ禍を忘れることはないだろう。しかし、紹介した福間教授の話のとおり、社会がどう記憶するかはまた別の話だ。今年亡くなった作家で僧侶の瀬戸内寂聴さんは、忘却には二重の意味があると説いた。ひとつは仏の慈悲としての忘却。つらいことを忘れられるからこそ、人は生きていける。一方で、人は忘れてはいけないことも忘れてしまう。それは厳しい劫罰に値すると言う。慌ただしく過ぎていく日々のなかで、年末年始はいくらか余裕を持てる時期だ。少しでもいい。立ち止まり、この2年間のあれこれを拾い集め、考える時間を持つてはどうだろう。自分が得たもの、失ったものは何で、次代に伝えなければならないことは何か。人それぞれに異なるであろうその物語を重ね合わせていくことが、コロナ禍で傷ついた社会を編み直すための糧になる。」



オミクロン株の感染拡大が懸念されるなか、年末年始の帰省ラッシュが戻ってきた=2021年12月29日、JR東京駅



年末年始を古里などで過ごす人たちが混雑する羽田空港の出発ロビー=2021年12月29日(12/30付け東京新聞から)



渋滞する東名高速道路下り線(右)=東京新聞社へリ「あさづる」から



- 今朝の東京新聞から、佐藤正明氏の風刺漫画『来年こそ よいお年を』を右に転載させて頂く。
- 東京新聞社説『大みそかに考える「歓喜の歌」とコロナ禍と』も以下に転載させて頂く。「新型コロナウイルス感染症の拡大で始まった今年も今日で最後。変異株が次々と現れ、感染収束はまだ見えない中、徐々にではありますが、年末恒例の「第九」演奏会が各地で復活しつつあるようです。ベートーベン作曲交響曲第九

番「合唱付き」です。コロナ禍が襲った昨年、感染拡大への懸念から、プロ・アマを問わず多くの第九演奏会が中止・延期されました。今年は客席数を制限するなどの感染防止対策を徹底することで、開催にこぎ着けたところも多いようです。例えば福井県小浜市では12月12日、中部フィルハーモニー交響楽団(愛知県小牧市)の演奏に乗せて、市民合唱団や県立美方高校音楽部合唱団の「歓喜の歌」が文化会館に響きました。1993年に始まった演奏会は昨年中止となり、開催は2年ぶりです。今年はこうした演奏会が日本各地で開かれ聴衆の心を揺さぶっていることでしょう。◆「年末の第9」戦前から 第九が日本で初めて演奏されたのは今から100年以上前の1918(大正7)年6月でした。第一次世界大戦中、徳島県板東町(現在の鳴門市)の板東俘虜収容所に収容されたドイツ兵捕虜がオーケストラをつくって演奏し、80人が男声合唱を響かせたのです。第九はその後、音楽学校の学生らによって歌い継がれ、1926(大正15)年に誕生した本格的なオーケストラ、新交響楽団(新響、NHK交響楽団の前身)によるプロの演奏会も始まります。放送会館(旧NHK東京放送会館)が東京・内幸町に完成した記念として、1939(昭和14)年5月20日にスタジオからローゼンストック指揮、新響による第九がラジオ中継されました。新しいメディアとして登場したラジオの電波にも乗り、日本中に歌声が響き渡ったのです。そのときの新聞のラジオ欄を見ると、第九中継への期待の高さがうかがえます。国民新聞(本社が発行する東京新聞の前身の一つ)の曲目解説から引きます。「ひとりベートーヴェンの代表的作品たるのみならず、凡そ音楽史上の最高傑作と目される第九番交響楽は実に楽聖ベートーヴェン苦吟十年の結晶であり、その50年に亙る音楽生活の総決算である。この壮麗なる音楽は器楽の到達し得る究極の世界を展開し、合唱付交響曲を創案以て彼の至高の境地を表現せんとした」翌1940(昭和15)年には、大晦日の12月31日に第九演奏がラジオで中継されました。今も行われている年末の第九放送もこのときが起源とされます。しかし、翌1941(昭和16)年の大晦日には第九は中継されませんでした。太平洋戦争が始まり、電波が統制されたからです。戦時中にも第九の演奏会やラジオ中継は続きました。出陣学徒が戦地に赴く前に聞きたいと願ったのも第九でした。でも、演奏会が広く復活するのは、終戦を待たねばなりません。音楽のみならず芸術・文化を日常から奪うのが戦争なのです。戦後、プロの活動に加え全国各地で市民合唱団が結成され、第四楽章「歓喜の歌」に挑戦しています。大規模な「万人の第九」も開かれるようになりました。歌声は日本中に響き渡り、すっかり年末の風物詩にもなりました。◆打ち勝った証しとして その喜びを再び奪ったのがコロナ禍でした。多くの演奏会が延期・中止に追い込まれた昨年よりは状況が好転しつつありますが、今年再開にこぎ着けた公演でも、合唱団員は離れて立ち、マスク着用の合唱を強いられています。外国人の独唱者が入国できず、やむを得ず日本人の代演を立てた演奏会もありました。変異株の感染拡大もありコロナ禍の影響を完全に脱したとはとても言えません。安倍晋三・菅義偉両氏は首相在任当時、東京五輪・パラリンピックを「人類がウイルスに打ち勝った証しとして開催する決意」と語っていましたが、結局、無観客での開催となり、コロナに打ち勝った証しにはなりません。むしろ何の制限もなく第九の演奏会ができるようになることこそが、コロナに打ち勝った証しと言えるのではないか。コロナの感染拡大を防ぐには、換気が重要な対策の一つですが、来年こそは換気ならぬ「歓喜の歌」が各所に響き渡る一年でありたい。そう願う年の暮れです。」

🗨 夜8時からのN響“第九”演奏会(尾高忠明指揮)を視聴させて頂いたが、いつもに増して感動的であった。日本人による4人の独唱グループとバックの合唱団との相性が抜群に良かったのがその一因ではないかと思っている。



2021年12月31日 文責：瀬尾和大